

No.30	昭和45年12月25日発行
ねじればね	編集者：後藤光男
	〒592 大阪府高石市高師浜2丁目4-4 電話 堺61局5374番
December, 1970	日本甲虫学会 〒658 神戸市東灘区御影町天神山46

ラベル印刷のあれこれ (4)

後藤光男

U

生態写真や標本写真を印刷するには写真版をとらねばならない。写真版は凸版と違って印刷される紙の種類によつて適当なスクリーンを指定せねばならない。スクリーン線とは1インチ角におけるスクリーンの数で何線とよんでいる。印刷物の目的にもよるが、普通次の表によつてスクリーン線が決定される。

50線・65線	輪転印刷の新聞
75線・80線	下級紙・中質紙を使うチラシ・雑誌類
100線・120線	上質紙やグラビア紙を使つた雑誌や書籍・カタログ
133線	普通のアート紙を使つたパンフレット・書籍類、一般雑誌の口絵
150線	特アート紙を使つたパンフレット類、写真雑誌や美術雑誌の口絵
175線・200線	特別な美術印刷物や学術的印刷物
300線・400線	特別な美術印刷物

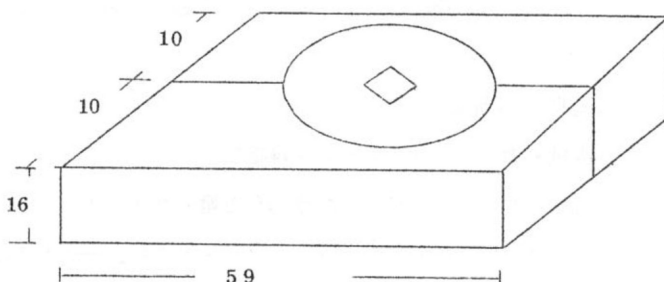
V

これまで凸版というと亜鉛か又は銅製だけかと思つていたが、樹脂製のものがあることを知つた。それは旭化成工業株式会社製のAPR版で、カメラによつて原図又は原画を縮尺又は拡大してフィルムネガを撮り、これを樹脂板に焼付けて6%苛性ソーダにて腐蝕処理をし原版を作成する。版面はこれまでの亜鉛板や銅板とまったく変わらないが樹脂製のため軟かく、曲げても折つても直ぐ復元し、切断も容易である。亜鉛・銅版の男性的な堅い感じに比べて、樹脂版は女性的で軟かい感じで

ある。その上亜鉛版は年月を経ると版面が腐蝕してくる欠点があるのに、樹脂製はその恐れがまったくなく、将来凸版といえば樹脂製を指すようになると考えられる。樹脂版の裏面には合成糊と保護紙が貼付してあつて、印刷の際に保護紙をはがして台板に樹脂版を貼付し印刷をする。製版価格も従来の亜鉛版や銅版と同値か又はそれ以下であるので、今後は利用が増えると思つている。

W

前号のQ項で卓上小型印刷器の版組箱に活字を固定するむつかしさに触れた。これまで組版の固定は最後にクサビ形の木片で活字・コミ（スペース）を締め付ける方法が普通であつた。しかしこのクサビ形木片の代わりにジャツキーという金具のあることを知つた。私の見たのは下図のような $20 \times 59 \times 16$ mmのもので、中央に四角穴のある円形の金具があり、 $10 \times 59 \times 16$ mmの2片の金属片がこれを囲んで付着している。付属のネジ（柱時計のゼンマイ巻のようなもの）を角穴に差しこんで右に廻すと2片の金属片が開き、左に廻すと元に戻る。この開く最大巾は5 mmであるから、このジャツキーを2個持つていれば組版の固定は容易である。



X

知合の印刷屋さんの好意で卓上小型印刷器を手に入れた。近くスクラップにされるころだつたが充分使える。現在市販されている卓上小型印刷器のほとんどは軽金属製なので軽々と持ち運びできるが、私の印刷器はすべて鋳物で作られているから概して太くゴツゴツした感があり、どつしりしている。卓上小型といつても私1人では持ち上げられない程の重さがあつて、メーカー・製造年も判らないが、かなりの年代物らしい。この印刷器はADANA印刷器によく似ているが、紙ハサミ台と組版の取付金具の動きがまったく逆である。印刷器は部厚な板上（ $400 \times 270 \times 45$ mm）に固定されている。構造は左側に押し下げする小形シャベルのような把手が付いている。一番前には手前に傾いた紙ハサミ台があつて、これと相対して固定された組版の取付金具があり、この間にやや

弧状に上下する2本のゴムローラーがある。インク台は丸形で組版取付金具の上部ややうしろにあつて前に傾いている。印刷の方法は把手を手前に下げるにつれて紙ハサミ台が上り気味で傾をつよめる。ローラーは除々に上つてきて組版の上を転がり、把手が水平の位置になつた時に紙ハサミ台と組版とが相接して印刷される。この時ローラーはインク台の上部に達して、次の印刷に必要なインクが塗付されている。把手を上に戻せば紙ハサミ台は組版から離れてローラーがさがり、再び組版の上を転つて印刷は完了する。ローラーがインク台から離れる時にインク台の裏の溝によつてインク台は少しく右に廻る。この回転はインクの濃淡を防ぎ均等な刷上にするため、28回の把手操作でインク台は1回転する。版組箱も鋳物製で活字は120×180mmの範囲まで組み込めるから、無理をすれば往復ハガキの広さまで印刷は可能である。だが版組箱は枠だけで底板はないから、凸版のように既に組版の状態のものならば大型コミ(スペース)とジャツキー2個で固定は容易であるが、4.5ポイント活字を組み込むには余程の技術が必要かも知れない。

Y

最近愛用の4.5ポイント活字を買足したが、本編を書きはじめた頃に比べて単価が倍以上になつていた。この活字は需要の少ない活字であることも述べたが、受取つたのは備蓄品でなく新しく鑄造されたピカピカの活字であつた。卓上小型印刷器を世話してくれた印刷屋さんが多量の活字を進呈しようと言つてくれている。なぜだと問うと「写真植字機とAPR版を導入しましたので活字が不用になりました。印刷屋という商売は印刷工程だけの機械化がすすんでいて印刷に入れるまでの準備工程と、刷上りを指定通り納入するまでの仕上工程の機械化が遅くれているから大変な人手を要します。特に一番必要な文選は人の力で1字ずつ活字を拾つてゆきますので、熟練者でないと時間に非常なロスがあります。その上最近若年労働者の確保もむつかしく、努力をして確保し時間をかけて養成をしても、ある程度熟練してくると引抜かれたり有利の方に走ります。印刷屋として生きるためには多額の投資も止むを得ません。その上活字というシロモノは種類も多く積み重ねができませんので、活字ケースに収容せねばならず、活字ケースは非常なスペースをとるものです」と言つていた。印刷屋の好意ある申出も欧文活字なら有難く丁戴して活用するのだが、邦文活字だけでしかも8ポイント以上しかないとのことなので辞退した。

Z

私は印刷に特別な関心をもつているので、会社へ出入の印刷屋とは特に親しく付合つてきた。印刷業界では再編成が盛んに叫ばれて合理化もすすめられているが、一方印刷代もどんどん値上げさ

れている。国内の学会や同好会の会費も年毎に小刻みから大巾へと値上りしてきたが、いつも印刷代の値上りが先走っていて、機関誌の会計報告で印刷費の支出増加がこれを端的に物語ってきた。印刷屋の話から推測すると、現在すでに活版による機関誌の発行は定期刊行で、ある程度の発行部数がまとまっているのであれば印刷は可能かも知れないが、部数も少なくそれに不定期であれば、余程の高額会費を徴収するかタイプ印刷に切换えねば、機関誌の発行ができない時代がやってきている。これまでA・B・C……と区切つて、私のラベル印刷の経験と印刷屋から仕入れたネタをデータラベルの印刷を軸として断片的に書き続けてきたが、現在印刷ということはどんどん進歩しているので、今後も新しい知識を吸収した時点で本編を書き続けたいと思つている。

マッチのラベルにオオセンチコガネが登場

後 藤 光 男

これまでに銀行がくれた宣伝マッチや現金袋に蝶とかハチ、ときにはトンボ等の昆虫が配されているのを見かけたが、東洋信託銀行が出しているマッチの大箱と小箱にオオセンチコガネが採用されているのを見付けた。大箱・小箱とも花・葉・キノコ・果実・種子・貝・魚・玩具その他とともに原色の標本写真で配されている。大箱は両面とも銀行マークを入れて3段6列に、小箱は3段3列に上のいろいろのものが配列されている。オオセンチコガネは大箱では表2段目の左から2つ目にやや縮少されて左向に、小箱では表の1段目の左端に2分の1位の大ききで配されている。ラベルに使用された標本は大箱・小箱で大ききは違つているが、肢の形から見て縮率のみ違えた同一標本である。この標本は触角も出されておらず肢も整えてないから、ラベル全体から見ると肢のアンバランスは苦にならないが、標本のみを見ると大変まずい標本作りである。又原色の方も美しいオオセンチコガネの色彩が出ておらず、むしろセンチコガネに近い色彩である。小箱はオオセンチコガネ1種だけであるが、大箱の裏には最下段にツマベニチヨウとナナホシテントウが配されている。イチゴ・ちようちん・ウチワ・ダルマ・カエデ・風船・太鼓・レモン・下駄・バラに混じるオオセンチコガネ、どのような意図で製作者がオオセンチコガネを用いたか知る由もない。強いて銀行と結び付けるなら、歌にある「黄金虫は金持だ、金蔵建てた蔵建てた」が当りそうである。

玉貫光一著・関口俊雄画

原色世界の甲虫 (Beautiful beetles of the world)

255頁、58図版。1970年6月。西日本教育図書株式会社、下関。8000円

甲虫は昆虫の中でも蝶に次いで愛好者が多く、最近では海外の大形種や美麗種を入手する機会もふえたのに拘わらず、これらについての図説が日本で出版されないのは、私たち甲虫の研究者としても残念に思っていたことである。今回出版されたこの豪華版の大著は甲虫研究歴40余年におよぶ玉貫光一氏が、日本一の昆虫画家である関口俊雄氏の協力をえて完成されたものであつて、F. P. Möhres と Ew. Reitter の同系列の著書を凌ぎ、私たちの年来の要望をみたしてくれるものといえる。収容された種数の200足らずは甲虫全体に比べて少数ではあるが、大きく精密に描かれた壮麗な色彩図は十分に各種を認識するのに足りるし、一般の人々にも甲虫の立体的な美しさを知らせ、興味を呼びおこさせるものであろう。それぞれの種について和英両文の説明と共に分布図が与えられているのも親切である。8000円という価格は高いと思うかも知れないが、外国書と比べればむしろ安いし、実物を見、美しい図をみれば、なるほどどうなずけるだろう。それにこれだけの美しい甲虫を手許においたと思えば安いものである。 (中根猛彦)

— 昆虫学評論第23巻第2号以降の原稿をお待ちしています —

本号(23巻1号)で手持原稿はすべて消化しました。当分の間投稿規定第4項の制限規定に関係なく長編論文を登載しますから、どしどしご寄稿下さい。

— また生態・分布などの新知見を短報としてお寄せ下さい —

特別会計収支計算書
(会報発行基金)

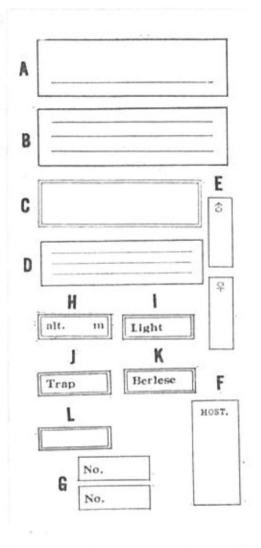
自 昭和44年 1月 1日
至 昭和44年12月31日

昭和44.	1.	1.	前期繰越金	536,339
		3.26.	金銭信託収益金(43年9/26~44年3/25)	894
		5.20.	30万円貸付信託収益金(43年11/20~44年5/19)	9,270
		6.20.	20万円 " " (43年12/20~44年6/19)	7,270
		9.26.	金銭信託収益金(44年3/26~44年9/25)	1,419
		11.20.	30万円貸付信託収益金(44年5/20~44年11/19)	9,270
		12.20.	20万円 " " (44年6/20~44年12/19)	7,270
		12.31.	次期繰越金	571,732

＜ 標本用ラベル ＞ ……お問合せ・ご注文は後藤まで……

甲虫標本整理用に添付見本のようなラベルを用意しました。
紙質は添付ラベル見本と同一か、種類によつてやや厚手の用紙を使用しています。

見本の A・B・C・D・G は現寸の縮尺 60% になっており、他は現寸です。送料 A-D は 20 枚まで、他は 40 枚まで 15 円です。



- A. 属用 (科・族共用) 1.2×4 (cm), 1 枚 8 片, 1 枚 5 円
- B. 種用 1.2×4 (cm), 1 枚 8 片, 1 枚 5 円
- C. 属用 (科・族共用) 1.0×3.5 (cm), 1 枚 10 片, 1 枚 4 円
- D. 種用 1.0×3.5 (cm) 1 枚 10 片, 1 枚 4 円

※ C・D は甲虫専用インロー型標本箱によくマッチします。

A・B は大型標本箱用ですが、蝶・蛾・トンボ標本の整理にピッタリです。

- E. ♂・♀ラベル 1 枚 (♂ 14 片・♀ 14 片) 1 枚 3 円
- E' ♂・♀ラベル やや大形 (0.5×1.5 cm) 1 枚 9 片 1 枚 3 円
- F. HOSTラベル 1 枚 8 片 1 枚 3 円
- F' HOSTラベル やや大形 (1.0×2.2 cm) 1 枚 10 片 1 枚 3 円
- G. 番号ラベル 0.5×1.5 (cm) 1 枚 16 片 1 枚 3 円
- H. 採集高度表示用ラベル 1 枚 17 片 1 枚 3 円
- I. 灯火採集表示用ラベル " 1 枚 3 円
- J. トラップ採集表示用ラベル " 1 枚 3 円
- K. ベルレーゼ採集表示用ラベル " 1 枚 3 円
- L. 任意表示用ラベル二重枠内白板 1 枚 11 片 1 枚 3 円

※ H~K と同一寸法で枠内に under bark (樹皮下) と印刷したものもあります。

1 枚 17 片, 1 枚 3 円。

属種ラベル 上記の A 2 片, B 5 片を 1 枚に印刷したもの 1 枚 5 円。

新入会員



住所変更



申告退会

認定退会

昭和44年度収支決算書
 (自昭和44年1月1日)
 (至昭和44年12月31日)

日本甲虫学会

収入の部			支出の部		
会費	30,140		印刷費	33,831	
バックナンバー代	6,615		通信費	3,871	
別刷代	20,827		消耗品費	345	
原色昆虫図鑑印税	42,814		大会費	11,640	
雑誌収入	11,036		幹事会費	4,230	
前期繰越金	477,157		雑誌費	185	
			次期繰越金	525,703	
計	919,384		計	919,384	